

研究課題 (テーマ)	学習相談室制度による学部から大学院を縦断する基礎学力教育の試み		
研究者	所属学科等	職	氏名
代表者	教務委員長	教授	榊 利之
研究結果の概要			
<p>面談指導を通じた初年度生に対する基礎教育の有効性についてはこれまでの学習相談室の活動を通じて実証されているが、特に、受講生に対するアンケートで「面談を強制されること」に対して好意的な意見が多いことは注目すべき点である。つまり学力不振の初年度生にとって教員に質問に行くという行為は多大な精神的な負担を感じることであり、一人では質問に行きづらいという状況がある。(教員側は「わからなければ聞きにすればよい」と簡単に思うが、プレッシャーを感じて質問に行けない学生がいる、ということは教員側が認識すべき点である。)本制度での体験を通じて、質問に行くプレッシャーが軽減されることが期待される。</p> <p>一方、学習相談員を務めた4年生や修士課程の学生(以降、上級生と略す)に対し、以下の質問内容のアンケートを行った。</p> <p>①学習相談員を務めたことは、自分のどのような能力アップにつながったか？</p> <p>②いま自分のとりくんでいる研究に対して役に立ったか？</p> <p>①については、主に2通りの意見があった</p> <p>(1)大学初年度に習った力学・電磁気の理解が深まった。(以下、回答例)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・理解が浅かったことがよくわかった。 ・他人に説明することで理解が深まった。 ・問題を解くことだけで精一杯で、内容をきちんと理解してないことがよくわかった <p>(2)他人に物事を伝える能力が向上した</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手が何を理解していないのか考える能力が身についた。(以下、回答例) ・相手にわかりやすく伝える力が身についた。 ・説明力が向上した。 ・相手にうまく伝わっているか確認することができるようになった ・飛躍のない論理的な説明を意識できるようになった。 <p>②については、学習相談員ほぼ全員が「いま取り組んでいる研究に対しても役に立った」という認識でいることが明らかになった。今回担当した上級生は、直接力学・電磁気学が関係していないテーマをもつ者も多いが、上記(2)のような説明能力の向上が役に立ったと感じているようであった。</p>			
今後の展開			
<p>上記の通り、学習相談室制度は初年度生から大学院生まで有形無形の知的能力の向上を実現する学習システムであることが実証された。今後もできる限り活動を続け、大学の知的ポテンシャルの向上にわずかなりとも寄与できるよう努力する。</p>			